礫陵新聞

発行所
若松高校新聞部
北九州市若松区小石
発行 編集
若松高校新聞部
印刷所
阪本印刷所 (☎)1527

行事予定

十月中旬	マラソン大会	
〃 下旬	期末考査	
十月中旬	駅伝	

守れ！着帽規則

忘れられた制帽

◈現在、制帽をかぶらずに登校している人が目立◈つ。その原因はいったいどこにあるのか。守ら◈れない規律、制帽着用の意義を探ってみた。◈

「われわれは、若松高等学校の生徒であることを自覚し、常に自己を研き、自己を高めることを忘れることなく、絶えざる努力を尽すこと。右、生徒心得となす。以下は生徒心得より導き出され、全校生徒に通じる具体的規律である。4、男子は必ず制帽を着用すること」これは、生徒手帳にある生徒心得の一部分である。

現在、若高生はこの規律を完全に無視しつつある。門を入ってくる男生徒の中に制帽をかぶっている人が何人いるであろうか。あっても守られない規律ならば、廃止した方がましである。

次は、執行部の制帽についての意見である。「制帽着用についての方向へ検討するつもりです。」

執行部は、生徒手帳の生徒心得に定めてあるように男子は必ず制帽を着用することが、高校生としての当然の義務であるという発想に基づいているのではありません。

昔の生徒大会で生徒が自らの手で定めた規則だからです。自分たちの手で決めたきまりを守る、これが民主的な集団のルールではないでしょうか。現時点において、制帽着用は守られてはいませんが、もし、生徒の間から廃止への要望が出れば、執行部としては改正へ

これぞ本来の姿

これによると、方針はあくまでも規律通りを立て前としてはいるが、生徒の態度によっては制帽着用の規律の廃止も可能であるという。しかし、方針を定めていながら何の手だてもとうじようとしないのはどうしてか。執行部はもっと積極的にとりくむべきだ。

制帽をかぶってくる人の中に、規律だからと意識してかぶってくるからかぶる、なければなくてもよいと思っているのではなかろうか。また 髪の形が悪くなるなどという理由でかぶってこない人もいる。これが、今の制帽に対する現状である。長髪が許可された時点において、制帽をかぶるということは条件になっていたはずである。それなのに、もう制帽は忘れられてしまっている 長髪許可がおり、若高生の意見が通った。それならばあとはどうなってもよい、条件などは無視だ。それでは、あまりに勝手すぎる。したがって、廃止を考えるとしたら、それと同時にこのことも考慮すべきだ。

制帽をかぶること、それは、この規律が定められた時点では、若高生であるということを認識させる一つの手段ではなかったろうか。かぶる若高生もそのことに誇りをもっていたし、愛校心もあったにちがいない。かって、制帽を廃止しようという動きが高まり、生徒大会が開かれたが、その案は否決された。このことは、その時分はまだ制帽に愛着があり、愛校心もあったということを示している。しかし、今の若高生には、そんなものはない。これも制帽をかぶらない一つの理由ではないだろうか。ただひたすらに髪形を気にしている。ポケットには常にくしをしのばせ、鏡と顔をつき合わせている。これでは、制帽をかぶれといっても聞くはずはない。また仮にかぶったとしても、何の目的もなく、ただ帽子を頭の上に乗せておくだけ。これでは、制帽は何の役にもたたない。制帽の意義、それは、あの白い二つの線と校章が若高生であることを示し、かつ、若高生としての自分を、ある時には、いましめるものであると考えられる。今のままでは、若高生ということを示してくれない。それならば、いっそのこと、かぶらないほうがましである。

帽子をかぶれ！たった一つの規律も守れないのか。そして、かぶりたくない者は、堂々とそれなりの態度で示せ！それさえしないで規律を破っているのは 民主主義の根本を無視して自分を甘やかしているにすぎない。これは、制帽だけにかぎったことではないが…。若高生よ！自覚して制帽をかぶろうではないか！

主張

孤独の意識と友情

礫陵新聞一二一号の主張において、青春時代に感じる孤独感について述べた。今回はそれに関連して孤独と友情について書いてみることにした。

皆さんの中には孤独と友情が何の関係があるのかと疑問に思われるかもしれない。しかし孤独の感覚なしには、いかなる友情も発生し成長しないものように思われる。あるいはまた孤独の意識をどのように感じるか、深く感じるか、浅く感じるか、孤独ということを人間のもって生まれたさけがたい宿命と考えるか、それともごまかしのきく一つの一時的な気持さと考えるか――そうした相違によって、友情のあり方も種類も異なってくる。いずれにせよ 孤独の意識や感覚なしにはいかなる友情も発生することはありえない。孤独の意識や感覚のない友情は、ただのおつきあいに伴なう感情に過ぎないのではないかと思う。ところで、人間の一生を通じて孤独ということをしみじみと感じる二つの時期があるように思われる。一つはいうまでもなく青春期。もう一つは年老いた時期。ここでは青春期の孤独感について述べているわけだが、後者との違いは、なにかを待っている、なにかを与えられそうだという気持ちの上に支えられている孤独感ではないだろうか。だからそれは、一種の明るさをたたえた孤独感と言えるかもしれない。自分はいま孤独だけれども、やがて誰かが現われて自分をなぐさめてくれるだろう。あるいは自分になにか大きなやりがいのある仕事が現われ、それに没頭して孤独なんて忘れてしまうだろう。こういった孤独ではないでろうか。もしかするとそれは「幸せな孤独」と言えるかもしれない。

我々はいまどんな孤独を感じているだろう。気持ちよく話し合う友達がいない、誰はもまわりの人達は自分のことを理解してくれない――という気持ちの孤独ではないだろうか。もしそういう種類のものであるならば、それは前にも書いた年老いた時期のある時期に感じる孤独感に比べれば、ほんとうに「幸せな孤独」ではないだろうか。

ところで友情を結んだときの経験を考えてみるとわかるように、昨日まで他人であった人間といきなり親しくなる。あるいは徐々に親しくなる。そういう場合なにが機縁となって親しくなるかといえば、言うまでもなく互いに似たような運命や問題をもっているからだ。しかし互いにその問題はわからない。相手の考え方や運命がわかってしまったら、かえって友人にはなれないと思う。

我々を甘やかしてくれる者は決して良友ではない。よく理解してくれようとすることは悪い事ではないが、それだけでほんとうのいい友達になれないだろう。つまり友達というものは、わからないところはどこまでも解らないものとして互いに追求し合う。ある時は責め合う。しかも意見の一致などということはなく、一つの問題に対してさえどんなに二人が異なるかを身をもって知らされるような友情、これが尊いのではないだろうか。表面だけで人と調子を合わせ、理解し合っているような顔をしているところに決して真の親しさは起らないだろう。だからほんとうの友情というものはかえって辛いものだ。友情のつらさを味わうことがほんとうの友情ではないだろうか。そして、こういう交わりのできるのも青春時代だけだと思う。人生にはじめて眼をひらき真剣になったときでなければ、このような友情は、できないだろう。

一人で生まれ、やがて必ず一人で死ぬ人間、このような人間の本質的な孤独性、それを考えることなしに友情を論じる事、これほどむなしくあさはかなことはない。

望めぬクラブの活発化

不満多い部室

昨年の九月、十二のクラブがプール下の部室に移って以来、一年たった。しかし、この一年間、各部屋はガラスが割れたり、暗くなっても電灯がつかない等、各クラブでは不満が多いようである。移動した当初は、一室を一つのクラブで使用できるとあって、評判が良かったのであるが……。

九月二十日現在、戸や窓のガラスが割れたり、ヒビのはいっている部室は十もある。これは、ほとんど部員以外の者の仕わざであろう。中には、窓ガラスの一部に穴をあけ、手を入れ鍵をあけることができるようになっている等、手のこんだ悪質なイタズラもある。このようにガラスが割れていては部外者の出入りが多く、盗難のおそれも多い。現に盗難にあったクラブもある。そのため、各クラブでは、鍵に針金をくくりつける、穴のあいている部分をベニヤ板などでふさぐ等、その対策に苦心している。

各クラブの対策としては、先生に届け出ることである。そして、先生方も届け出があった場合には早急にガラスを入れるようにしてもらいたいものである。

また、各部室は、元の電源を切っているため、暗くなっても、電灯がつかない。そのため、各クラブは、あまり遅くまで活動することができず、活動を活発にできない状態である。電源を切った理由は、あるクラブが電灯線から電気をひき、他のものに使っていたためだそうである。しかし、いつまでもこのような状態では、各クラブの活動が活発になるのは、いつのことかわからない。

プール下の部屋の問題はそれだけではない。あるクラブでは、雨が長く降り続くと、天井から雨がもってくる。そして、プールの水が壁からもってくるなど、工事のずさんさが活動を思うようにできなくしている。

だが、各クラブ特に文化部では部室は活動の中心である。これらの部室の問題が解決しない限り、各クラブの活動の活発化は望めそうにない。

一年優勝!! 十年ぶりの快挙

一体育祭

去る九月二十四日、第二十四回体育祭が行われた。この日は前日の空模様とうって変わって、秋晴れのすがすがしい天気となったがグランドコンディションが悪かったため、予定より三十分遅れて九時に入場行進が始まった。

競技は女子の一〇〇㍍走で始まり、一年生がトップで快調なスタートを切ったが、三人四脚で二、三年がチームワークの良さで逆転した。女子遊競技ではいつもおとなしい女子が本性？を多分に出していた。

重量運搬、拝借競技と進行して行く間にも二年は他学年と点差を開いていった。また、三年男子によるタンブリングや若高剣士による野試合、騎馬戦などは

若い力とからだが、ぶつかりあいまさに「男の世界」といった感じだった。そして、午前の部はスウェーデンリレーで飾られた。この時点の中間得点では二年一三百四十九点、三年一二百八十五点、一年一二百五十五点と二年がトップで楽しい昼食となった。

午後の部は、人気のある学年別対抗の応援合戦で始まった。各学年とも、練習の成果を充分発揮して素晴しい演技を見せてくれた。中でも三年生は全員の協力で、色彩豊かな見事な演技だった。

二、三年の女生徒によるダンスは、噴水を鮮かな青い布で良く表現していて印象的だった。

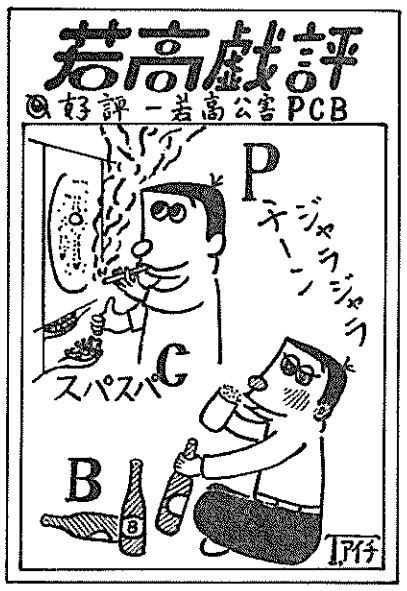
男子障害走、職員リレーと続き得点は二年一四百十点、三年一三百五十一点、一年一三百十点とやはり二年が強く、三、一年は追いつけずにいた。その状況の中で若一年一四百二十一点と二年が十年ぶりに優勝し、三年は苦い敗北をあじわった。結果は何れにせよ、各学年ともテーマの「闘魂」むきだしで戦い、素晴しい体育祭だった。

高名物山車行進が行なわれ、三年の各学級とも恩師の特徴を良くとらえ 手工をとりした見事な山車だった。

いよいよ競技は終りに近づき、全男女選手による百足競争となった。チームワークがよく快調にいく組や、足がもつれてひっくりかえる組などバラエティーにとんで楽しい競技だった。そして、

プログラム最後の競技、女子選手による四〇〇㍍リレーとし男子選手による八〇〇㍍リレーが行なわれ、やはり最後とあって選手と応援とが一体となって最終競技にふさわしい勝リレーであった。

優勝は二年一五〇〇点・二位三年一四百六十点・三位一年一四百二十一点と二年が十年ぶりに優勝し、三年は苦い敗北をあじわった。結果は何れにせよ、各学年ともテーマの「闘魂」むきだしで戦い、素晴しい体育祭だった。



礫陵言

三年生の諸君達は、あとわずかの学校生活を残して、社会人になって巣立って行く。今はその準備に余念のないことであろう。

振り返って 諸君達が本校に入学した当時を思い浮べて見るとき、まだ中学生の気分のぬけきらない「素直」な言動が、いたるところで目についた。この「素直さ」は、高校生活の中では貴重なものである。両親や、先生方や、社会の人々の要求に対して「素直」に従うことは、そういう人々にとっては、なんと感じのよいことであったことだろうか。「いい子だ、いい子だ」といくら頭を撫でても足りないくらいである。

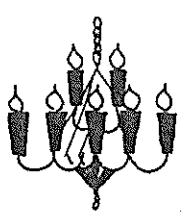
しかし、この「素直さ」のままで三年間を過ごして、社会人になったとしたらどうであろうか。他人にとっては好都合の人物ではあっても、本人自身にとっては、自己を喪失した社会人としての第一歩を踏み出すことになるだろう。悲劇の生涯の幕開けである。

「素直さ」は、高校生活の三年間を通して乗り越えなければならない。乗り越えるということは、否定することではなく、より高次な形に変えて生かすことである。

「謙虚さ」に変えて生かすことである。

「謙虚」に他人の言動を受け入れるということは、簡単に見えることであるが、実行となるとなかなかむつかしい。目の前の利益や感情に支配されやすい自己はとかく利己的になりがちである。自己主張だけに終りがちである。しかし、自己を他人に認めてもらいたいなら、それと同じように他人を「謙虚」に認めなければならない。そこに健全な、真の自己を認めた社会が成り立つ。

高校生活の中での「素直さ」が貴重なものである以上に、社会人の資格として「謙虚さ」は必要不可欠のものである。（金子）



原因は何か！

ふえる青少年の家出と自殺

◉現代、問題になっている青少年の家出や自殺、そ◉の原因は何か、死に至るまで追いつめられた人間◉は何を考えているのか。それを追究してみた。◉

最近になって青少年の家出や自殺がめだって多くなっている。特に家出は夏休みで解放され気のゆるみがまだ続いている九月、家庭や学校からの逃避などが多い十月と、家庭や社会のひずみの中で安易に家を飛び出すケースが目立っている。

現代からの逃避、学校からの逃避、そして自己からの逃避、これらからいきつくのは、家出か自殺しかないのか。

将来の目標もない現代、大学の受験地獄、生徒間どうしの友情や連帯感が薄い予備校化された高校生活、そしていこいの場であるべき家庭では親の大学進学過剰奨励……。ふと考える死の世界、空は青く雲は白く、緑の丘に寝て空を見あげる。未来もなく過去もない止まった世界。小鳥は歌い、花は咲きみだれ広い丘にひとりぼっち——。

福岡県警防犯課が調べた昨年一年間の家出人の割合は、14才～17才63％、18才～19才26％、20才以上11％と、青少年の家出はなんと全体の90％にもおよんでいる。今年の七、八月だけでも二五〇人という数。いったい家出の動機はなんなのか。

芸能界にあこがれて家出、東京のあんみつ屋に住みこんだところで保護された女子高二年（16才）ボストンバッグ一つで東京に行くつもりが、小倉駅で公安員に保護された高校一年生（15）。などいわば「大志型」。

成績が悪いのを苦に家出した中学二年生（14）。

「お母さんがギャアギャアいうからいやになりました」と、置き手紙をして自転車で出た中学二年生（13）など「逃避型」と、大きく二つに分けられる。どちらともかなりの決断力がいると思うし、親の権力からぬけだして自分の力で生きていこうとする自立心は大切だとも思う。実際この平凡な毎日を真剣に考えて見れば、必然的に家出といったものも出てくる。それが出てこないのはどこかで妥協しているにほかならない。（「妥協」なんて人間的でいいかげんなことばだろう。でもこれがないと人間は生活できない。愚かなこと。）

しかしそれならば妥協しているわれわれは自立心や決断力がないのかというと、そうもいえない。とすれば、安易な気持で死や旅（家出）をえらぶのはなぜか。

ただいえることは、このごろの青少年は非常に不安定な心の中で生活している。それを平均的なものにしようとする学校。平均的な心、平均的な考え、平均的な日本人。それからぬけだそうとする人しない人。

「どうせたのんで生んでもらったんじゃないんだ。こんな命ほしくもないや、どうせ生まれたからにはいつか死ぬんだ。こんな世の中に生きていたって。そうさ、ぼくは旅に出るんだ。永遠の旅に……。」

九月一日、高校生の自殺者九名どう思いますか、この現実を！

カメラアイ

あなたは、この写真を見てどういう感じを受けますか。

カッコイイと思う人もいれば、感じが悪いと思う人もいるでしょう。我校では大部分の人が長髪にしているが、その中にもいろいろ程度があり、肩までとどくほど長い人もいれば、さらにパーマをかけているという高校生としての限度を越えている人もいる。

前号の若高生についてのアンケートの結果を見てもわかるように、多数の人が長髪について「感じが悪い、だらしがない、不潔」等の意見を述べている。必ずしも長髪が悪いというのではなく、制限や清潔さが必要だと思われる。もっと高校生としての個人の自覚をもってほしいと思う。

投書

私は訴えたい

修学旅行諸問題

修学旅行は終った。天候にも恵まれ、みんな、それぞれ楽しんで帰って来た。

しかし、問題も残った。それは、一年生学年大会という形で表面化した。

出発する以前から、くすぶっていたいろいろな問題が、結果的にああいうこととなってしまったのだと思うが、そのひとつにAコース・Bコースの先生方の差という問題があった。Aコースは比較的規則について甘く、Bコースは厳しかった、というのが総対的意見だが、先生として生身、二つのコースで行ったという時点で、それは認めるべきだ、という意見もあったようだ。

具体的には、消燈時の点呼・見回りが、Bコースは行き過ぎであり、Aコースは、消燈過ぎても先生といっしょに遊んでいた（うらやましい）といったこと等である。

ともかく、この様な不満は私達を動かした。全員ではないにせよある真剣さが、学年大会にはあった。

ここで私は訴えたい。

修学旅行という全体的利害的問題だったから、私達は行動しただけだったろうか。

私は違うと思う。

あそこにあった不満は、常日頃私達が、心の内で感じていた、先生への不満が、具体化された問題となって表われたたんなる問題であった。

修学旅行は楽しさと同時に、それらの集約であった。

一年半も若高につかっていたから、半ばあきらめていた断絶復交だったが、まさか日中復交に刺激されたわけでもあるまいがこれではいけない、という思いが、みんなを行動させたのだと思う。

しかし、学年大会の結果はみじめだった。問題はうやむやに終わり、何も残らなかった。いや、やっぱりだめかという、あきらめは残った。

先生不在、生徒不在、単になれあい的学校生活。やっぱり現状打解は無理なのだろうか。

修学旅行は楽しかった。

先生不在でも、楽しくやれた。

私達が今持っている考えは、いわばユタヤ教的なものである。

つまり、排他的であり、メシアを望んで不変的な、先生と生徒復交を持っている。

メシアはいないか!!　（二年女子）

訪中記

——南京にて——

松本昭文

八月十五日、私は南京市に在る雨花台にいた。ここは南京城壁の南側にあたり、南京市が一眺できる実に閑静な高台である。

雨花台の責任者が次のように云った「ここの砂や土のひとつひとつは、革命烈士の血で染っています」

この南京市は、旧日本軍による南京大虐殺の行なわれた場所でもありますと通訳がバスの中で私に話してくれた。

一九三七年十二月十二日、午後四時頃、日本軍は南京に侵入し、この雨花台を占領し、遂には城内に攻撃を加え、機関銃、小銃、手榴弾などを乱射し、中国人を襲い二晩かかって、三千万人を殺しました。

中国人は、かって日本人が加えた苛酷な仕打ちを進んで話そうとはしません。しかし、私たち日本人は、事実は事実としてはっきりと過去の歴史を認識しておく必要があると思います。

そのことを踏まえた上で、日中間の今後のことを考えていきたいと思っています。

幼稚園から大学（北京大学）までまわってきましたが、夏休み中にもかかわらず、各学校で温かい歓迎をうけました。特に蘇州では旅館の前で生徒が歓迎をつけました。

万里の長城にて　松本先生

この夏は有意義だった。短期間であれ一度我自身を海外に置くと、とかく日本人の生活と外国人の生活を比較し、客観的な目で日本を我々自身を振り返るものだ。欧州人達は夕食に約二時間を費やす。それも、家族で会話しながら食事のだんらんを楽しんでいる。我々の食事ときたらまず楽しむというより、エネルギー源を補給するかの如くで短時間に胃袋にかきこむスタイルであるから、レストランでは食事のサービスが遅いとあちこちでトラブル発生。ボーイもこの日本人のせっかちには目を白黒。僕も向こうの作法に従うのが礼儀だと思って、この二時間で吸うのには少々閉口した。本当に彼らは悠長でありのんびりしている。また日本人は肩から二台のカメラをぶら下げ、どこに行っても自分の目で確める前にシャッターを切る。写真を撮り終ればもう安心したような風で、ろくに見学もしない。

ブリュッセルでは、このエコノミックアニマルの撮影振りを新聞社が写していった程だ。我々は旅そのものを楽しむというより帰国後、報告したり、友人に自慢するために足跡を残しているのに過ぎない。要するに自分の旅でありながら常に他人を意識している。

どうして我々はどうまで見栄っ張りで余裕がないのか考え込んでしまった。最近、日本人の働き過ぎは世界の非難の的となっている。休暇もとらずに残業して官越しの金を残そうとする。

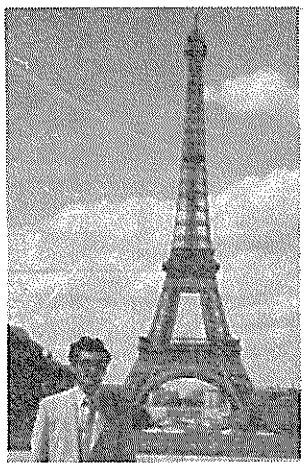
欧州人は、長期の休暇をとり充分に休養し、自分達の生活そのものをエンジョイする。

我々日本人が自分を犠牲にしてまでも働くのは低賃金労働と社会保障の不備のためだと思う。そういう中から他人よりもガツガツ働いて少しでも楽をという考えが生まれ、人間的余裕をなくしたと思える。

我々のせっかちも、あながち日本人本来のものでは、なさそうである。

ヨーロッパ エジプトの旅

西尾紘一



パリの象徴
エッフェル塔前にて西尾先生

どうする台湾問題

——日中国交樹立——

九月二十九日、日中両国関係に新しいページを開く日中共同声明が、北京の人民大会堂で両国首脳により調印、発表された。

この共同声明は前文と本文九項目からなっている。前文では①戦争状態の終結という両国国民の願望の実現②日本が中国に与えた重大な損害について日本の責任の痛感と反省③日中国交正常化によるアジアの緊急緩和と世界平和への貢献などがうたわれている。

本文では、

▽日中のこれまでの不正常な状態は共同声明発表で終了する。▽日本は中華人民共和国が中国の唯一の合法政府であることを確認、台湾が中国の領土の不可分の一部であるとの中国の立場を理解尊重する。▽中国は日本に対する戦争賠償請求を放棄するなど、多年にわたった日中の不幸な歴史に終止符が打たれ、両国の国交が正常化された

この日中国交樹立により、戦後二十七年にして、わが国は最大の近くて、小学生や近所の人々の歓迎をうけ、道路にあふれ交通巡査が整理するほどでした。

再見、再見（さようなら、さようなら）と握手しながら子供たちと別れて来ました。

私はこの手のぬくもりを決して忘れないさやかな決意をしています。

"戦後"を解決したわけである。そして、アジアの政府大国・中国と経済大国・日本が敵対し、角突き合わせていたのではアジアの安全と平和はないが、この日中和解は「新時代の始まり」「アジアの緊張緩和に役立つ」という期待感が持たれている。

しかし、この和解は中国側の「小異を残し大同につく」という妥勢により成立したような形であるため、今後に残された小異（問題点）は少なくない。

その一番の大仕事は、日中平和友好条約の締結である。その目的については共同声明の第八項でも「両国間の平和友好関係を強固にし、発展させるため」とはっきりうたわれている。しかし、この基本条約に何を盛るかは、まだ完全に白紙の状態である。条約を締結する場合には、平和五原則を基礎とする恒久的な友好が中心に据えは？

たものの残る実務的な結びつきをどうするかという問題である。すでに政府としては「貿易、経済関係をはじめ各種の実務的関係については現実的に解決される」との立場を固め、台湾側もこの"政経分離方式"を期待している。

これから先、私達は日中国交見守ると同時に、もっとこのような問題に関心を持ってもいいのでは？

られることになるだろう。

また、もう一つの問題点は、尖閣列島問題である。この問題を困難にしているのは、列島周辺の大陸ダナに膨大な石油が埋蔵されていると推定されているのと、北方領土問題とにらみ合っているためである。この問題をどう打開するかは、残された日中問題で最大の焦点となるであろう。

そして、過去二十年にわたって続いた日台関係の清算も　日中の新しい道を整えるに当たって避けることのできない仕事である。外交関係は二十九日断たれ

正しい視力を提供する
区内全眼科御指定
コンタクトレンズ 特約店
アイチ眼鏡店
本町三丁目8—24　TEL(761)3312

服飾手芸専門の店
しらき
若松区明治町

ラーメン専門店
珍軒
—本町銀座—

知って欲しい日本の良さ

―初の交換生マーク君―

マーク君

I AM MARK SHULL, AMERICAN EXCHANGE STUDENT. I LIVE IN MUNCY, PA. IN JAPAN I AM STAYING IN TOBATA. I WILL BE HERE FOR ONE YEAR AND THEN RETURN TO MY COUNTRY. IN THAT I HOPE TO LEARN AS MUCH AS POSSIBLE ABOUT JAPAN. I WANT TO MAKE MANY FRIENDS AND ENJOY MY YEAR IN THIS COUNTRY.

上の文はマーク君の自筆です

我校にとって、初めての交換留学生であるマーク・シャル君が来日してから、はや一カ月半が過ぎようとしている。そこで、留学期間のこの一年を若高生とできるだけ仲よくできるように、ここに彼の横顔を紹介してみよう。

マーク君は、アメリカ合衆国東部のペンシルベニア州、マンシィ市の出身で、一九五六年一月七日生まれで当年十六歳。家族は両親と兄と弟二人、妹二人の八人家族である。また、彼はスポーツマンで特に、スキー、水泳が得意だということだった。

彼の父も留学生として日本に来たことがあり、小さい時から日本の話を聞いていて、いろいろ想像していたということだ。

そこで、日本に来て受けた印象を聞いてみると、初めはなんて、こせこせしているのかと思ったそうだが、今は、友好的で親しみやすく、とても勤勉だと思うと答えてくれた。しかし、アメリカ人に比べると内気で、恥かしがり屋、それに体が小さいという感想をもらしていた。マーク君は、身長一八六㎝、体重八五㎏、こんな彼の目には多少大きな日本人でも小さく写るのだろう。

さて、次に日本にどのくらい慣れたか尋ねてみると、常もかなり使えるようになったし、日本の食べ物もたいていのものは食べるそうだ。また、初めの頃のように靴を脱がずに畳に上がるという失敗も今はほとんどないという。彼は将来、法律関係の勉強をしたいと言っている。この留学を有意義に活用してもらいたいものだ。

これから約一年。マーク君には日本の良さを十分に知ってもらい小さな友好の和を広げていってもらいたいものだ。

若高生諸君も、彼に親しみを持って心暖かく接していこう。

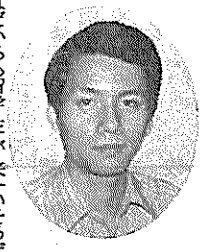
谷村君米へ留学

我校からも二年生の谷村典洋君が、ロータリークラブの交換学生としてアメリカに留学した。

彼から来た手紙によれば、友達もたくさんでき、先生がたも大変親切にしてくれるので特別不自由な事もなく、とても楽しくすごしているとのこと。

谷村君の住んでいるニューヨーク州のイサカは大きな町で日本人も百人ほど住んでいるほか彼の学校にもフィリピンやオランダなどからも留学生が来ているそうだ。また、オリエンタルショップがあり、日本の物が何でも売っているので、彼の母変わりであるナンシーフランクさんが、時々ごはんや日本料理なども作ってくれるそうである。

彼は学校で英語、数学、化学、歴史、タイプ、体育を選択しているが、数学においては日本よりも一・二年程度が低いとのことである。また、器具やその他の事に関しても日本の学校とは比べられないほど、規模が大きいそうだ。



谷村君

一年間アメリカのきれいな（？）空気を十分に吸って、来年七月には、アメリカでのおもしろい体験談をおみやげに元気で帰って来てほしいものである。

自主的な定時制生徒

夕日が若高坂を照らし、我々全日制生徒が帰途に着く頃、勤めを終えた私服姿の多い定時制の学生達が登校して来る。

現在の定時制の生徒数は、普通科・商業科を合わせても約百七十名ほどで、年々深刻になっている生徒減という問題を抱えている。

その理由として、中学校から全日制の高校への進学率が上昇してきたということや社会の定時制に対する認識不足などがあげられる。これらに対して先生方は、区内の各中学校を回り、就職希望者を対象に説明会を催したりして努力している。しかし一方では生徒減に関して統廃合の問題がある。この統廃合とは、年々生徒数が減っている定時制何校かを一校にまとめてしまおうというのである。だがそうすると、必ず通学に不便な生徒が出てくる。学校に来る意志はあっても時間の都合で来ることができないなど諸問題が出てくるので先生方と生徒は、この案に反対している。

このような問題を抱えていながらも生徒達の表情は明るく、先生方との間も非常に親密で先生と議論を交じえる為に職員室に行く生徒もいるということだ。

次に出席率をみると、三年生が一番良く一年生が一番悪いそうである。

授業時間は、五時五十分から九時十分までであり、それ以後は、十時ぐらいまでクラブ活動が行なわれる。ところで、生徒は時間的にほとんど自由時間というものがないようなのでこれについて定時制生徒に質問してみたところ、自由時間は日曜日ぐらいしかないという。それでもやめようなどとは思わないそうである。

また、「定時制に来て得たものは？」という質問を卒業生を対象に

登校中の定時制生徒

今から約一ケ月半ほど前に催された。第二十四回文化祭を振り返って見て生徒の関心度はどうであったろうか。

文化祭を通し私達は何を考えさせられただろう。

ここで考え直してみよう去る九月九、十日、第二十四回文化祭が催された。

アンケートを行なったところ一位に「友人ができた」二位に「困難な条件の中で通学したということに大きな意義をみいだす」ということだった。

また、風紀について尋ねてみたところタバコなどは、職員室前に喫煙室を設けて、そこで吸うように決めており、これはだいたい守られているとのこと。尚、服装、長髪については、皆社会人である為に、余り厳しくは規制していない。

それから定時制の生徒達は、大変自主的であり、生徒会にしても役員改選の際には立ち合い演説会を行なったりしている。

定時制のこのような自主的な活動を、我々全日制生徒も見習わなければならないところがあるのではないのだろうか。

失なわれたテーマ

―第24回文化祭―

今年は例年と違いテーマはなかった。というのは、毎年テーマの基に文化祭が行なわれていなければならないのに、大部分のクラブはテーマとは無関係なことを発表しあまりにテーマというものを軽視し過ぎていたので、今年はテーマなしの文化祭が行なわれたものである。

また、従来土・日曜日に行なわれていた文化祭が、去年はふとした問題で、金・土曜日に行なわれるということになり、若高生は文化祭を楽しむ心を無残にも打ち砕かれたが、今年は例年通り行なわれた。

二十一の文化クラブが、夏休みも返上して練習や研究してきた成果を、型にはめられず自由に発表した。しかし最近、若松区の風紀が乱れているせいか下校時間が厳しく、準備時間が制約され、早朝から活動するというクラブもあり、時間のため思うように活動できなかったのではないだろうか。

その他では、文化クラブの他に昨年同様クラス参加が認められ、二の一が参加した。二の一は喫茶店『バーラーたけし』を開き、全員が一生懸命働き、その売り上げは施設に贈り社会福祉に協力した。

また、体育館のフリータイムでは生徒によるフォーク・ロックの演奏が行なわれ、我校生徒は、もちろんのこと、一般父兄や他校の生徒の人気を呼んでいたようだ。

さて、今年の文化祭の生徒の関心はどうであっただろうか。見せる方のクラブ員は、練習や研究の成果を皆に見てもらおうと、見学者に一生懸命説明していたが、真剣に耳を傾け質問していた人もいれば、あまり関心のない人達が、その前を素通りする光景も多く見られた。中には、ただ、しおりを集めるために来ているような人も何人かいたようである。

我々は、この文化祭で、何か考えねばならないところはないのだろうか。文化祭をただ行事的なものだけで終わらせてはいないだろうか。文化祭に対しての生徒の関心は、毎年同じ状態が繰り返されている。今年の文化祭の現状を見てもわかるように生徒の関心度は薄れはしないものの、一向に向上のきざしが見受けられないようである。

このようなことでは、文化祭を行うことがあまりにも無意味なものになるのではないか。だから、今こそ、文化祭の意義について、個人がもっと考え直す時だ。そしてその反省をもとに来年の「若高文化祭」の成果を期待したいものである。

秋に招く

▼スポーツの秋▲

秋はいいですねェ。何といっても涼しいし、汗をかくにも一番気持ちのいい季節です。運動部の皆さん、クラブ活動にはげみましょう。四年後のモントリオールめざして、レッツゴー！

▼芸術の秋▲

音楽や美術を鑑賞するのには最高の季節になりました。

皆さん、芸術に親しみましょうたとえば見近なところで、童心に帰ってラクガキをするとか、わらべ歌を口ずさむとか……。

▼読書の秋▲

本を読むのに、一番適した季節です。

虫の音が響きわたる秋の夜長にコーヒーでも飲みながら、本を読むのは楽しいことですね。

時間に追いまくられて、短編もろくに読めなくなったこのごろですが、やはり秋には、ゆっくりと長編でも読んでもらいたいものです。

▼食欲の秋▲

オイモチャンが、おいしい季節になりました。女の子（？）にとっては、うれしい季節ですね。

はりきって食べましょう。（但し体重計が、こわれない程度にネ）

▼勉強の秋▲

今は勉強にいちばんいい季節なんです。好きな人も嫌いな人もいるでしょうが。とにかくがんばりましょう。（疲れたら休みましょう）

聞き書き

尊敬する人は自分のおふくろ

体育祭を明日にひかえ、なんとなくあわただしい九月二十三日、我々新聞部員四名は、宮丸のバス停から五分ほど坂道を登りつめた高台にある教員アパートに、お住いの数学科担当の清家先生のお宅を訪問した。

お子さんといっしょに現われた先生はいかにも家庭的だった。きれいに整頓された部屋に通されると、さっそく質問を始めた。

―まず先生の出身校は

大分県の佐伯鶴城高校から九州工業大学（電気科）

―先生になられて何年目ですか

6年目かな。今年の四月までは、若高の定時制にいた。

―先生になられた動機は

一番の原因は、兄貴が教員だったからかなあ。学校を卒業してから二年ほど会社にいたが性格的に合わなくてね。

―学生時代の思い出といったら

修学旅行やキャンプがなかったせいか、体育祭のあとのファイヤストームなんかが一番思い出される。

―御家族は

妻と男の子ふたり（二才の邦宏君と二カ月の和也君）

―御趣味は

つり。小さい時から近くに海があったので、その他には写真等にこったこともあったけど。

―尊敬する人は

自分のおふくろ「年をとったせいかな」と笑っておられた。

―若高の雰囲気は

クラブなど、しっかりやっているように見えるし、自分の高校時代に比べて、のびのびしているみたいだね。

―長髪をどう思われますか

人が見て、不快感を与えない程度ならいいんじゃないかと思う。

―男女交際について

からっとした交際だったら、多いにけっこう。

―御結婚は、お見合？恋愛？

いちおう見合い（奥様も佐伯の出身で先生は小さい頃から知っておられたそうだ。）

次に側におられる奥様に質問

―奥様から見られた先生は

他の人から見れば、まじめでおもしろみがない人じゃないですかネ。（奥様は、生徒がとっつきにくいのではと、さかんに心配しておられた。）

―最後に、どんな教師でありたいと思いますか。

（はっきりと）生徒が何でも相談にやって来てくれるような教師。

質問を終えた我々は、先生に定時制のことや、全日制に変わってからの失敗談などを聞いたあと、はずかしがる奥様と共に記念撮影。明日の体育祭の天候を心配しながら帰途に着いた。

清家先生の巻

龍そば
本町銀座 TEL (771) 4320 TEL (771) 4407

文具・菓子
釜崎商店
小石峠若高前 TEL(761)9045

広く・明るく・美しく　フレッシュ　丸柏
若松
丸柏
本町3丁目 TEL (761) 1231

どうなる空と海

―北九州市の公害―

■水俣病の裁判が問題になっている現在、われわれの郷土、北九■
州市にも、公害の波がおしよせている。大気汚染、洞海湾の汚■
濁、騒音……。その中から、大気汚染、洞海湾の汚濁につい■
て、少しでも若高生に知ってもらおうと、ここにしるした。■

産業の進展と都市活動の活発化に伴う、環境への暴進的な悪影響は、いよいよ複雑さと深刻さの度を加え、その防止施策は急務となっている。

われわれは、今年の夏休み、洞海湾の水質調査と、北九州市の大気汚染を調べたわけだが、その予想外の汚染のひどさに驚いた。

水質調査は若松海上保安部は、大気調査は観測局のデータを参考に調べた訳だが、水質調査の方は定期調査船に便乗した、実際の目で確かめてどうだったか、まず現状の汚濁源を見てみよう。

流域人口四十一万人、幅一キロ奥行十三キロの細長い湾に、日に四百十万立方メートルほどの汚濁水が流れ込む。これでは汚れない方がおかしい。それも年々増加する状態。これを取締るはずの市は今や野放し同様の対策である。

では、いったい洞海湾はどうするのか。初めに問題になるのは、膨大な量のヘドロ、汚濁水処理。

現在、下水道の完備につれて、家庭下水の汚濁は減る反面、工場排液は増加する一方である。これをいかに減少・無害なものにするかは、北九州市の条例一つにかかっているといえよう。

注目される場所は、渡場付近と奥洞海、それと響灘工場近隣。

渡場付近は、最近魚もとれ、きれいになりつつあるが、奥洞海、響灘工場近隣は、今後どのような形で汚染が進むか、われわれも、しっかりと見つめていく必要があるのではないだろうか。

公害の実体を調べてみると、北九州市の大気汚染は、予想外にひどくなっている。工場の煤煙と直接関係のある、イオウ酸化物は、若松・戸畑が目立って多い。また降下ばいじん量は、逆に、小倉・八幡区の城山地区は、回りを工場にかこまれ、一日中煤けた空、そして煤煙と、非常に住みにくい所に変わっている。

実際にこの城山小学校では、千人の生徒が、わずか百五十人に減るといった、都市の中の過疎という珍らしい現象をおこしている。では、そういう大気汚染の結果、おこるものは何か。

昭和四十五・六年度のぜん息調査の結果、八幡、小倉、若松、戸畑、門司の順に増加している。ということは、工場の煤煙や粉じんも、ぜん息との関係を認めなければならない。それはいったい何を意味するか！

われわれの回りの環境は、一歩一歩極限に近づき、気づかない間に、公害は除々に体をむしばんでいく。

若松の発展のためにつくした洞海湾は、まさに死の海に変わり、澄みきっていた空は、明日にもあなたに、ぜん息といった恐怖を与える。その中でわれわれ高校生は、いかに現状を見つめそれに対処するか、ライスィング＝ジェネレーションとして、真剣に考えてみようではないか。

そして、わすれないでほしい。次の公害の被害者は、あなたの番かもしれないことを！

シリーズ 汚れゆく郷土

―北九州市―

北九州市。この名を聞いて、あなたは何を連想するだろうか。工業都市・公害・若戸大橋・関門トンネルなど、いろいろなものを連想することだろう。

我々の郷土＝北九州市はどのような都市なのであろうか。

北九州市は、昭和三十八年二月十日、門司・小倉・戸畑・八幡・若松の五市対等合併によって、全国で七番目の百万都市として誕生した。

では、どのような産業により、発達してきたのだろうか。

北九州市は、古来より陸海交通の要衝であり、外国文化導入の門戸として発展してきた。そして、（明治三十年）現在の新日鉄八幡が官営製鉄所として設立されて以来、産業交通の立地条件に恵まれ、石炭や石灰石の産地に近いことなどの利点から、日本の四大工業地帯の一つ、重化学工業都市として発展してきた。

現在北九州市には、約二二〇〇の工場と一四万の従業員があり、年間四六〇〇億円の生産額をあげている。その生産物のうちわけをみると、鉄鋼・粗鋼・鋼材などの鉄鋼一次製品、ソーダ灰・板ガラス・セメント硫安などのよう業、化学工業製品が大きな割合を占めている。このように、重化学工業の原材料生産が中心で、消費材生産が少ないのが特色である。

しかし、この工業発展が、公害の北九州市というイメージをも引きおこしてしまった。

日本一の汚れた海・洞海湾は、海とは信じられないほどのコーラ色・悪臭である。

そして、大気汚染においても日本有数の町である。至る所で、イオウ酸化物濃度などが環境基準値をオーバーし、若松では亜硫酸ガスも環境基準値をオーバーするなど人体に害をおよぼし、ゼンソク患者も増大している。

そして現在では、響灘の埋立地にも続々と工場ができ、ますます公害の増加に輪をかけている。

昭和三十三年の関門トンネル、三十七年の若戸大橋の完成により観光地としても発展してきた北九州市。だが、これら北九州の自然も、公害により破壊されようとしている。

我々はこの問題に黙っていてはいけない。我々の手で何とかしなければ。

我々は、もっと郷土というものに関心を持ってもよいのではないだろうか。

ほしかった事前の話し合い

―問題残った修学旅行―

九月三十日から十月五日まで、二年生は高校生活の最も大きな思い出となるであろう修学旅行を行なった。しかし、今年の修学旅行は例年と違い、Aコース・Bコースと二つに別れるなど、修学旅行の目的の一つである生徒間の親睦を深めることができなかったと、生徒の間から多くの不満の声が聞かれた。

今年の修学旅行は、黒部を中心とする中部日本・東京・富士箱根へと進むBコースと日光・東京へと向うAコースに別れた、ABコースが一緒だったのは、往路の若松から小倉までのバスの中、小倉―新大阪間の列車、復路の静岡―新大阪間の新幹線、新大阪―戸畑間の列車だけであった。二つのコースの選択は、一年生のうちに希望をとっていたが、同じクラスでありながら、一緒に楽しむことのできないという変わった修学旅行であった。

二つのコースにわけたのは、生徒の希望のコースを調べたところ希望が幾つかに別れていたため、いやいや嫌いなコースに行くよりも、好きなコースに行く方が楽しいであろう、という先生方の考えからである。一年生の時、全員が同じコースに行くか、幾つかのコースに分けて行くほうが良いか、生徒の決をとったということである。しかし「そのような話はなく最初から幾つかのコースに別れるので、希望のコースを選べ、と話があった」と生徒がいうのはどういうことであろうか。

二つのコースに分けて以来、生徒の口から多くの不満が聞かれた。生徒間の親睦を深めるための修学旅行を、二つに分けるのでは何の意味も持たない、といった不満ばかりであった。旅行が終わってからも「全員一緒のコースに何故しなかったのか」という意見ばかりである。

二つに別れるのに賛成の生徒は「人数が少ない方がゆっくりしていて、楽しむことができた」というのだが。

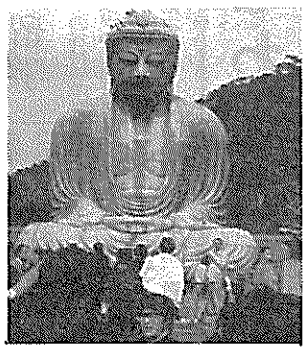
今度の修学旅行は、A・B二つのコースに分けたため、生徒にとっては不満ばかりの旅行だったようだ。このあたり、先生方はもう少し、生徒のことを考えてもらいたいものだ。そして、生徒も不満があれば、それを自ら進んで直そうとする努力が必要である。

また、今度の修学旅行では、往復路の列車の中で消灯時間が過ぎたら、男子と女子が違う母車に別れ、全く話すことすらできないということが問題となった。このことは、復路の7号車で話し合いが行なわれ、帰ってからの反省会でも議題の一つとなった。

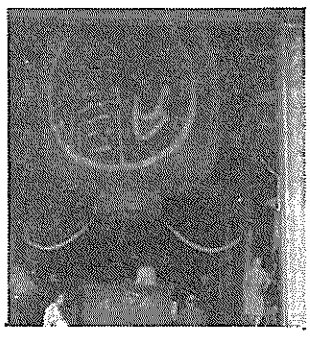
そこでの生徒の意見は「クラス間の親睦を深める修学旅行だから男女を区別せずクラス単位にまとめることが必要」ということであり、先生方の意見は「責任上、男女を一緒の席にはできない。しかし、ある程度は生徒の意見に妥協した」ということである。

そして、7号車での話し合いの中で、先生方は「男女の席を一緒にするか、別々にするかを生徒の間で話し合ったはず」というのだが、生徒は「そんな話はなく、クラスには、男女は別々の席と決まったと伝わってきた」といい、先生方と生徒とのやりとりが行なわれた。その場で、先生方は生徒の意見を取り入れず、自分達の考えをおしつける、という不満が多くの生徒の口から聞かれた。

今年の修学旅行を機会に、今度の修学旅行のあり方を考えてみるべきであろう。そして、先生方はこれから先、生徒の意見をもう少し聞き入れてもらいたい。また生徒はこれを機会に、自らの三無主義に気づき、自らの手を打破すべきである。



▲鎌倉の大仏



▼浅草の雷門

積極的な校内美化

門司高等学校の巻

他校訪問

二学期が始まってまもない九月十六日土曜日、我々新聞部員六名は、来年五十周年を迎える県立門司高等学校を訪問した。

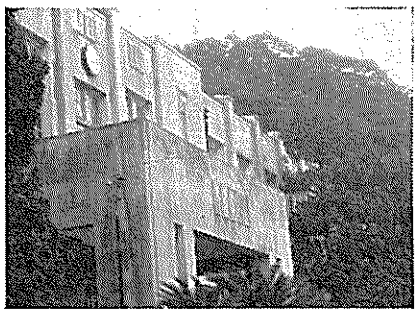
門高はバス停から十五分ほど登りつめた長い坂の上にあり、四方を山に囲まれている。門高の全生徒はこの長い坂を電車通りから約二十分歩いてくるそうだ。バイク、自転車通学は禁止されている。

門高の生徒総数は八百五十名と若高よりかなり少なく、男女の比は、三対一と男子が多い。クラス数は、全学年とも六クラスである。

門を入ってすぐにある運動場はあまり広くないが、多くのクラブが練習していた。そのクラブ数は、運動部十三、文化部十四で若高にない同好会というのが五ある。中ではテニス部、剣道部、茶道部などがさかんであり、全般に運動クラブは低調だそうだ。

校風は、若高にある三無主義に無計画が加わった四無主義がはびこっているとか。風紀面では、遊戯場などの出入は自由。しかし、長髪検査が生徒の手で行なわれ、男子はえりにかからないよう、女子は肩まで伸びたら結ぶよう、位は中間考査との合計点によって出される。これも若高とちがうところである。

無主義いと表面上はなっているが、その内容は試験範囲に入っているし、出ないと先生にチェックされるというきびしさである。また、期末考査の順



風格ある玄関

学習は若高よりずっときびしい。前に述べた講習だが、これは八時三十分までであり、出なくてもいい。

門高生と先生との仲、それは、人間として信頼しているのではなく、大学の通し方のいか悪いかで、先生としての信頼しかないそうだ。

年の行事である文化祭は、今年は若高と同じ日に行なわれたが、実は三年おきにある。それと並ぶ体育祭は、クラスマッチ形式で三日間行なわれ、種目に、サッカー、ハンドボール、バレーボール、バスケットボールなどがあるそうだ。

いろいろな質問のあと、校内を案内してもらった。驚いたことに、ゴミ一つなく、きれいに清掃されていた。それというのも、廊下のすみにゴミ箱、ほうき、ちりとりが置いてあり、ゴミに気づいた人がすぐ掃除できるようになっていて、全校生徒が校内の美化につとめている。この点は、若高生の見ならうべきことであろう。

二時間余り、話を聞いたのち、自然の中にそびえ立つ門司高校に別れをつげ、夕暮れの中、長い坂を下りはじめた。

◈編集後記◈

礫陵新聞第二二五号いかがでしたか。今回は、文化祭、体育祭、修学旅行、中間考査といろいろな行事が続くなかで、企画会議から発行まで全て一年生が主体となって、電気のない部室に暗くなるまで残ってやっとの思いで作り上げました。内容としては、忘れられた制帽問題を始めとして、アメリカからの交換生マーク君の事や定時制の紹介、体育祭、修学旅行などを取り上げてみました。

いろいろと読みづらい点もあると思いますが、私達にとっては初めて作り上げた礫陵新聞として、ここに自信を持ってお届けします。

尚、写真は一部写真部提供

USA 本場のブルージンから
パターンドまで
ウェスタン
この欄持参の方 一割引き
ロータリー前 (761) 2026

新刊 辞書
雑誌 参考書
石松書店
本町銀座 TEL (761) 2415

舶来化粧雑貨 何でも揃って親切な
みだしなみの店
きねや
本町三丁目5番3号 (771)2651
老松町 (771)2652